〔研究論文〕

アンセルムスと「聖母マリアへの祈り」

―なぜアンセルムスはマリアを「世界の和解者」と称したのか―

山崎　裕子 [1)]

〔Article〕

Anselm of Canterbury and *Prayers to Saint Mary* : Why Did Anselm Denominate Saint Mary 'Reconciler of the World'?

Hiroko　YAMAZAKI

Abstract

In *Orationes* (Prayers) Anselm of Canterbury called Saint Mary *mundi reconciliatrix* (reconciler of the world), though this is written only once. Originally this denomination was used not for Mary but for Christ. The expression *mundi reconciliatrix*, however, uses the strict senses of the words, even though it is revolutionary. Anselm could use it for Saint Mary because he added *mundi* (of the world) to *reconciliatrix* (reconciler). In this case reconciler of the world is used in a general sense. On the other hand, Anselm uses *reconciliator* (reconciler) for Christ without the word 'mundi.'

Consequently, 'reconciler of the world' is not inconsistent with the original meaning of *reconciliator* (reconciler). It was possible because Anselm composed his prayer with thoughtful attention and with strict use of words. Anselm recognized Saint Mary's unequaled greatness and he described her as 'reconciler of the world.'

序

カンタベリーのアンセルムス (1033-1109) は、体系的なマリア論としてのまとまった著作を残してはいない [2)]。それにもかかわらず、彼のマリア論には深い側面があり、シュマウスは、アンセルムスのマリア論が本質的な意味合いにおいて創造的であると指摘した [3)]。聖母マリアについてのアンセルムスの叙述は、『処女懐胎と原罪について (De conceptu virginali et originali peccato)』、『クール・デウス・ホモ (Cur Deus homo)』ならびに『祈り (Orationes)』の中に含まれている。

1）やまざき ひろこ : 文教大学国際学部国際理解学科教授

2）本稿は、次の拙論を日本語訳し、加筆修正したものである。Hiroko Yamazaki, Reconciler of the World: Anselm's Understanding of Saint Mary, *Fides et Ratio*, ed. by Stanislaw Bafia and Marek Urban, Pontifical University of John Paul II in Cracow, Faculty of Philosophy, Cracow (Poland), 2010, pp. 275-282. また、この論考の基本的構想の初出は、以下の小論である。山崎裕子「アンセルムスによる聖母マリアの理解」、日本宗教学会『宗教研究』第 359 号、2009 年 3 月、250-251 ページ。上記二編ならびに本稿を執筆するに際し、トマス・アクィナス『神学大全 32』稲垣良典訳（創文社、2007 年）所収の「解説 トマスの聖母論」のアンセルムスの項（122-125 ページ）に啓発された。その後のご助言をも含め、稲垣良典先生に心から感謝いたします。

3）Michael Schmaus, Die dogmatischen Grundlagen des Marienkultes nach Anselm von Canterbury, in *De cultu mariano saeculis VI-XI*, Rome, 1972, p. 615.

アンセルムスは『祈り』において、一回のみではあるが聖母マリアを「世界の和解者 (mundi reconciliatrix)」と称した。「和解者」という呼称は、元々はマリアに対してではなくキリストに対して使用されたものである。しかし、「世界の和解者」というマリアに対する表現は革命的であるとはいえ、アンセルムスは言葉の厳密な意味を用いている。本稿ではまず、アンセルムスがなぜ聖母マリアを「世界の和解者」と呼んだのかを分析し、次いで、聖母マリアに対する呼称に関するアンセルムスの特徴とそれが意味するものについて考察してみたい。

Ⅰ. 聖母マリアへの祈り

アンセルムスの『祈り』は 19 の祈りからなり、そのうち第 5 から第 7 の祈りがマリアに捧げられている。第 5 の祈りは「心が麻痺したときに、聖なるマリアに捧げる祈り」、第 6 の祈りは「心が戦慄におびえるときに、聖なるマリアに捧げる祈り」、第 7 の祈りは「聖母マリアとキリストの愛を求めて、聖なるマリアに捧げる祈り」である。

第 5、第 6 の祈りに比べて第 7 の祈りが圧倒的に長く、たとえば、第 5 の祈りがラテン語で 51 行、第 6 の祈りが 74 行であるのに対して、第 7 の祈りは 199 行に及んでいる。

アンセルムスは、これら第 5 から第 7 の祈り、つまり聖母マリアへの 3 つの祈りを、弟子で修道者であるグンドルフスに送っており、グンドルフスに宛てた書簡 28 において、アンセルムスが別の修道者から聖母マリアへの祈りを書くように何度にもわたって要請されていたと記している [4)]。アンセルムスは聖母マリアへの祈りを書いた後でそれに満足できず、別の聖母マリアへの祈りを書き始めた。そして、2 つ目の聖母マリアへの祈りにも満足できず、さらに 3 つ目の祈りを著した。アンセルムスはグンドルフスに、祈りが長いことをわびている [5)]。

ちなみに、199 行に及ぶ第 7 の祈りは、現代の私たちの感覚からするととても長い祈りに思われるかもしれないが、中世においてそれはめずらしいことではない。第 7 の祈りは 21 の段落に分かれている。アンセルムスは序文において、それらを必ずしも最初から読み始める必要はなく、自分が気に入ったどの個所を読んでもよいとし、段落に分けて書いたのはそのためであるとしている [6)]。そして、心を騒がせることなく落ち着いて、読み飛ばしたり急いだりせずに、一回に少しずつ、そして没頭して注意深く瞑想しながら読むことを勧めている [7)]。

---

4) Anselmus Cantuariensis, *Epistola 28* (Ad Gondolfum monachum): F. S. Schmitt (ed.), *S. Anselmi Opera Omnia II (iii)*, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1968, 135-136.

5) このことは、アンセルムスが「聖母マリアへの祈り」を、満足しなかった第 5 の祈りと第 6 の祈りをも含めてグンドルフスに送ったことを意味している。R. W. Southern, *Saint Anselm: A Portrait in a Landscape*, Cambridge, 1990, p. 107. “So here, from his own pen, we have a strange story of reluctance, repeated failure, and final success. In addition to his own account, we have manuscripts which preserve texts and drafts representing different stages on the road to success; … .” また，アンセルムス自身、グンドルフス宛ての書簡 28 で、「聖母マリアへの祈り」を受け取ってほしいと、グンドルフスに対して祈りを複数の形で表現している。Anselmus Cantuariensis, *Ep. 28* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 136, 14. “Accipe igitur *eas*, quae factae sunt tua intentione, …” イタリクスは引用者による。

6) Anselmus Cantuariensis, *Orationes sive Meditationes*, prologus: F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 3, 8-10. “Nec necesse habet aliquam semper a principio incipere, sed ubi magis illi placuerit. Ad hoc enim ipsum paragraphis sunt distinctae per partes, ut ubi elegerit incipiat aut desinat, …” アンセルムスはグンドルフスへの手紙においても、『祈り』を自分の選んだどの段落から読み始めてもよいと書いている。Anselmus Cantuariensis, *Ep. 28* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 136, 18-20.

7) *Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 3, 2-5. “*Orationes sive meditationes* … non sunt legendae in tumultu, sed in quiete, nec cursim et velociter, sed paulatim cum intenta et morosa meditatione.”

Ⅱ. なぜアンセルムスは聖母マリアを「世界の和解者」と称したのか

アンセルムスは、マリアにさまざまな形容を与えている。たとえば、

第 5 の祈り
生命の源（genitrix vitae）[8)]
救いの母（mater salutis）[9)]

第 6 の祈り
わたしの聖母（domina mea）[10)]
わたしの希望の母（mater spei meae）[11)]
神の母（mater dei）[12)]

第 7 の祈り
世界の聖母（domina mundi）[13)]
命の門（porta vitae）[14)]
救いの扉（ianua salutis）[15)]
万人の贖罪の館（aula universalis propitiationis）[16)]
人類の生命と救済の器であり神殿（vas et templum vitae et salutis universorum）[17)]
いとも祝福された者（beatissima）[18)]
善良な母（bona mater）[19)]

等々である。

さまざまな形容のなかで画期的であるのは、一個所のみとはいえ、マリアを「世界の和解者（mundi reconciliatrix）」[20)] と称していることであろう。というのも、神と世界を和解させる「和解者（reconciliator）」という呼称は、本来であれば、マリアにではなくキリストに帰せられるのがふさ

8）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 5* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 13, 8.
9）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 13, 8-9.　第 6 の祈りにも「救いの母」という表現がある。但し、第 5 の祈りでは“mater salutis”とあるのに対し、第 6 の祈りでは“salutis mater”という逆の語順で表記されている。Cf. Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 17, 58.
10）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 15, 23.
11）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 16, 24.
12）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 16, 28.
13）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 7* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 18, 15.
14）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*,20, 47.
15）*Ibid.*
16）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 20, 51.
17）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 21, 51-52.
18）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 22, 115.
19）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 24, 147.
20）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 17, 55

わしいからである[21)]。

では、アンセルムスはなぜマリアを「世界の和解者」と称するのであろうか。聖母マリアに対する他の呼称と合わせて比較すると、「世界の和解者」というアンセルムスによるマリアに対する表現は、画期的であると同時に、細やかに心配りされた言葉の使い分けに裏打ちされていることがわかる。

「世界の和解者（mundi reconciliatrix）」と「和解者（reconciliator）」には、言葉の構造上、二つの違いがある。第一に、reconciliatrix が女性形で、reconciliator が男性形であること、第二に、そしてこちらの方がより重要であるが、マリアに対する呼称である“mundi reconciliatrix”には、「世界の（mundi）」という言葉が「和解者」に付け加えられていることである。では、ここでの“mundi”には、どのような意味があるのだろうか。

アンセルムスはマリアを、「全ての人の和解の源（causa generalis reconciliationis）」[22)] とも形容する。「和解の源」は「和解に導く者」という意味で表現されているが、ここで重要な意味合いを有するのは、“generalis”の一言であろう。アンセルムスがマリアを和解との関係で捉えるとき、和解を総体的な、そして全体的なものとして捉えていることが、ここで判明するからである。アンセルムスはイエスについては、「あなた（= マリア）の御子は罪びとたちの和解」[23)] と表現し、「罪びとたち」という言葉により、人間の罪を強く意識させている。

世界の和解者としてのマリアは、マリア自身が世界を神と和解させるという直接的な意味合いにおいてではなく、和解をもたらす道を整えるという意味で、理解することができよう。アンセルムスはマリアを、「 和解の道（via reconciliationis）」[24)] とも称している。それに対して、アンセルムスがイエスを形容するときには、“mundi”を用いず、「和解者（reconciliator）」[25)] と表している。

他方、アンセルムスが「世界の」という言葉を加えるのは、救い主について言及するときである。「世界の救い主（salvator mundi）」という表現をアンセルムスは二回用いる。第 7 の祈りにおいては、「世界の救い主が、わたしたちの兄弟です（salvator mundi est frater noster）」[26)] と語られ、「 世界の救い主」は「わたしたちの救い主」と言い換え可能であると考えることができる。第 19 の祈りでは、次のように書かれている――「そして、わたしの心が望むようにではなくわたしの口が願うようにでもなく、わたしが望むべきで願うべきであるとあなたが知りかつ望むように、世界の救い主よ、わたしの願いを常に聞き入れてください」[27)]。ここでは、わたし（= アンセルムス）が世界の救い主であるイエスに向かって祈る。これらのことから、アンセルムスが救い主に「世界の」という単語を加えるときには、救い主をわたしたち各人にとっての救い主として考えているとみなすことができよう。

ところで、第 6 の祈りには、イエスを「世界を和解に導かれた方」と書き表し、マリアを「和解に導く者」ではなく「世界の和解に導かれた方を養われた方」として言い表している個所がある。

21）サザーンは、アンセルムスによる“mundi reconciliatrix”が革新的な表現で、「新しいアプローチへの道を開いた」と示唆している。R. W. Southern, *op. cit*., p. 108.

22）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 7* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 20, 51.

23）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 7* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 23, 121-122.

24）*Ibid*. : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 20, 47.

25）*Ibid*. : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 20, 58-59.

26）*Ibid*. : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 23, 140.

27）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 19* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 75, 53-55. “…; et me, non sicut vult cor meum nec sicut petit os meum, sed sicut scis et vis me debere velle et petere, semper exaudias, *salvator mundi*, … ” イタリクスは引用者による。

そこでは、「だれよりもやさしい聖母よ、（中略）、世界を和解に導かれた方を養われた方以外、だれに仲介を乞うことが考えられるでしょうか？」[28] と表記され、マリアは和解へ至るための仲介者として考えられている。新約聖書には、「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです」[29] と書かれているので、アンセルムスの文章が聖書の内容と矛盾しているかのような印象を与えるかもしれない。しかし、マリアは母として人々のために配慮するという観点から、仲介者と言われるのである[30]。

アンセルムスがイエスに対して「世界の救い主」と述べるときには、マリアを「世界の和解者」と表現するのとは異なり、総体的・全体的な視点というよりも、むしろ、私たちの個人個人が意識されていると思われる。

Ⅲ．アンセルムスは、イエスとマリアをどのように形容し、diligere をどのように用いたのか

アンセルムスは、言葉を厳密に用いた人物である。そのことを裏付ける一例として、「愛する（diligere）」という言葉を、イエスとマリアの形容の仕方によって、どのように使用したかを見てみよう。第 7 の祈りの終わりで、アンセルムスは次のように書いている。

> Ergo bone fili, rogo te ① per dilectionem qua diligis matrem tuam ②, ut sicut tu vere diligis ③ et diligi vis ④ eam: ita mihi des ut vere diligam ⑤ eam ⑥.[31]
>
> それゆえ、よき息子よ。私は、あなたが自分の母親に対して持つ愛（dilectio）によって（②）、あなたに（①）乞い願います。あなたが自分の母親を真に愛し（③ diligis）、また愛されたい（④ diligi vis）と望むように、私が彼女（= マリア）を（⑥）真に愛する（⑤ diligam）ようにしてくださいますように。

文頭の「よき息子」は、イエスを意味する。アンセルムスは、自分がマリア（eam、彼女 : ⑥に該当）を本当に愛することができるように助けてくれることを、イエス（te、あなた : ①に該当）に祈り求める。

> Bona mater, rogo te ⑦ per dilectionem qua diligis filium tuum ⑧, ut sicut tu vere diligis et diligi vis eum: ita mihi impetres ut vere diligam eum ⑨.[32]
>
> よき母よ。私は、あなたが自分の息子に対して持つ愛（dilectio）によって（⑧）、あなたに（⑦）乞い願います。あなたが自分の息子を真に愛し、また愛そうと望むように、私が彼（= イエス）を（⑨）真に愛するように計らってくださいますように。

28）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 15, 12-14. “… , domina clementissima, … : cuius enixius implorabo interventionem, quam cuius uterus mundi fovit reconciliationem?”

29）「テモテへの手紙 一」第 2 章第 5 節

30）第二バチカン公会議『教会憲章』日本司教団秘書局訳、中央出版社、1990 年（第 1 刷 1967 年）、99 ページ参照。

31）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 7* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 25, 185-187.

32）*Ibid.* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit.*, 25, 187-189.

文頭の「よき母」は、聖母マリアを意味する。アンセルムスは、自分がイエス（eum、彼 : ⑨に該当）を本当に愛することができるように助けてくれることを、聖母マリア（te、あなた : ⑦に該当）に祈り求める。

ここで私たちは、イエスに呼びかけた前半の文で、彼女（⑥に該当）とあなた（①に該当）がマリアとイエスに対する表現であり、聖母マリアに呼びかけた後半の文では、彼（⑨に該当）とあなた（⑦に該当）がイエスとマリアに対する表現であることに気付く。②の「あなたが自分の母親に対して持つ愛によって」という表現と⑧の「あなたが自分の息子に対して持つ愛によって」という表現は、同じ種類の愛を指し示しており、これは人間同士の愛に該当する。

ラテン語のカリタス caritas は、形容詞 carus に由来し、動詞形がないので、dilectio の動詞形である diligere は、カリタスの動詞形としても用いられる。カリタスには、神の人間に対する愛、人間の神に対する愛、人間同士の愛の 3 つの意味が含まれるが、「聖母マリアへの祈り」において、名詞 dilectio の動詞形がイエスとマリアに対して用いられるときには、人間としてのイエスとマリアに限った使われ方となっている。アンセルムスは上記の文章で、神人であるイエスの人性に言及しているのである。

Ⅳ．聖母マリアに対する呼称のアンセルムス的特徴

では、再び、総体的な視点と各人を強調する視点を比較して検討してみたい。第 2 節の後半で、「世界の救い主（salvator mundi）」という表現には各人にとっての救い主という意味合いがあると指摘したが、mundi ではなく singularis と形容してイエスを「個々人の救い主（salvator singularis）」と直接的に言い表し、総体的にではなく各人を連想させる書き方がなされる個所もある。

> Salvator *singularis*, dic quem salvabis, salutis mater, dic pro quo orabis, ...[33)]
>
> 個々人の救い主よ、あなたは誰を救おうとなさっているのでしょうか。
> 救いの母よ、あなたは誰のために祈ろうとなさっているのでしょうか。

この文章は日本語に翻訳するとラテン語の言葉の持ち味がわかりづらいが、ここでは“singuralis”というラテン語を付け加えることによって、salvator singularis（個々人の救い主）というイエスに対する呼称が、個人個人の救いを強調する表し方となっている。それは、マリアに対する呼称が「世界の和解者」という表現で総体的に表されるのと対照的であると言えるであろう。また、イエスが「救い主」と表現されるのに対して、マリアが「救い主の母」ではなく「救いの母」と表記され、イエスとマリアのちがいが明確にされている。

ところで、アンセルムスが、singularis と generalis を同じ一つの文章の中で用いている個所が同じく第 6 の祈りにある。意味合いの異なる 2 つの言葉を併用して、矛盾が生ずることはないのだろうか。アンセルムスは、「イエスに母乳を与えた方」としてマリアを表現し、次のように書いている。

33）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 17, 57-58.

Aut cuius intercessio facilius reo veniam impetrabit, quam quae illum
generalem et *singularem* iustum ultorem et misericordem indultorem lactavit? [34)]

すべての者 そして *一人ひとり* を正義にしたがって罰し、また、慈悲深く罪を許す方に母乳を与えた方以外の誰が、罪びとのためにたやすく許しを願って仲介してくださるでしょうか。

ここで、「すべての者（generalis)」と「一人ひとり（singularis）」を併記しているのは、双方の意味が異なり矛盾することがないためであると思われる。「一人ひとりを罰する」とは、個人個人が犯した罪、すなわち、自罪を罰することを意味し、他方、「すべての者を罰する」とは、アダムとエヴァによる行為の結果として、人間が負っている原罪を意味すると解することができる。それゆえ、アンセルムスは、罪に関する局面においてイエスに対して generalis を用いる場合には、マリアに対してとは異なる意味合いで捉えているのであり、singularis と generalis の併用に矛盾はないと思われる 。

呼称のみならず神とマリアを対比して書かれた文章も、アンセルムスによるマリア理解を知る助けとなる。第 7 の祈りにおいて、アンセルムスは印象的な書き方でマリアに言及する。

Nihil aequale MARIAE, nihil nisi deus maius MARIA.[35)]

マリアに等しいものは何もなく、神以外にマリアよりも偉大なものはない。

この文章により私たちは、アンセルムスがマリアを「世界の和解者」と呼びつつも、決してマリアを神と同等にみなしているのではないことを確認することができる。

今挙げた文章と同じ段落で、アンセルムスはマリアを端的に特徴づける。

Omnis natura a deo est creata, et deus ex MARIA est natus. Deus omnia creavit, et MARIA deum generavit. Deus qui omnia fecit: ipse se ex MARIA fecit, et sic omnia quae fecerat refecit.　...
Deus igitur est pater rerum creatarum, et MARIA mater rerum recreatarum.
Deus est pater constitutionis omnium, et MARIA est mater restitutionis omnium.[36)]

すべての存在するものは神によって創造され、そして、神はマリアからお生まれになった。神は万物を創造し、そしてマリアは神をお産みになった。万物を創造した神、その神ご自身が自らをマリアから作り、そして創造なさったすべてのものをこのように再創造なさった。（中略）
それゆえ、神は被造物の父であり、マリアは再創造されたものの母である。神は万物を形作った父であり、マリアは万物を再建した母である。

34）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 6* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 15, 16-18. イタリクスは引用者による。
35）Anselmus Cantuariensis, *Oratio 7* : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 21, 93-94.
36）*Ibid*. : F. S. Schmitt (ed.), *op. cit*., 22, 97-100 et 22, 101-103.

結語

アンセルムスは聖母マリアについて数多くの形容をし、なかでも画期的であるのは「世界の和解者（mundi reconciliatrix）」という表現である。和解者という言い方は、本来的にはキリストに帰せられるものであるが、アンセルムスは「世界の」という言葉を加えて和解を総体的な意味合いにすることによって、マリアに対しても内容上矛盾なく表現することができた。それは、アンセルムスが言葉に細やかな配慮をしつつ著作していたからこそ、可能であったと思われる。

アンセルムスは、イエス・キリストについての理解を通して、聖母マリアの理解を深めていった。言葉を緻密に使い分けて、マリアを「世界の和解者」と称したのは、アンセルムスがマリアの比類なき偉大さを認識し、そのことを形容するためであったと言うことができるであろう。

（2010 年 11 月 17 日）